

## 十七世紀タマレイン劇の一材源

—— 英訳本 *Asteria and Tamberlain* (1677) について ——

佐々木 昇 二

王政復古期の1681年にオックスフォード及びロンドンのシアター・ロイヤル・ドゥルアリー・レインで上演されたチャールズ・ソーндーズ(Charles Saunders)の *Tamerlane the Great* に関して一般に注目されることがあるとすれば、それは、当時有力であった劇作家で大詩人のジョン・ドライデンがエピローグを寄せていること、そして、同じ年のうちに出版された刊本の序文の中で、作者自身が、約一世紀前のクリストファー・マーロウの同名の作品のことなどは全く知らないし利用もしなかったという意味のことを語っているという二つの事実であろう。いずれの点も王政復古後の劇壇の模様を知る上で興味深い資料となりうるが、特に第二の点はまた、エリザベス朝演劇の初期に一世を風靡し次々と模倣作品を生み出した主人公像が、十七世紀後半の舞台でいかなる変貌を遂げることになるのかという観点から見る場合に大変重要な意味合いを持つことは言うまでもない。実際にソーндーズの作品がマーロウの作品とは似ても似つかない仕上がりになっていることについては、すでに詳細に検討してみたことがあるが、<sup>1)</sup> 引き続いてここでは、同じ序文の中で作者自身が明記している材源である散文物語 '*Tamerlane and Asteria*'<sup>2)</sup> と比較検討してみることで、十六世紀末から十八世紀初頭のニコラス・ロウに至るその変貌の過程の一段階を具体的に跡づけておきたいと思う。

ソーндーズが言及している作品の正式のタイトルは、*Asteria and Tamberlain; or, The Distressed Lovers: A Novel*<sup>3)</sup> といい、同じく扉に '*Written in French by a Person of Quality. And rendered into English, by E. C. Esq*' とある通り、フランス語のオリジナルから英訳されたものである。原著者の '*Person of Quality*' については Anne de La Roche Guilhem (1644-1707) であることが明らかになっているが、イニシャルで示された英訳者は判明していないようである。ただし、ソーндーズ自身の場合と同様に、原著者についても必ずしも詳しい所まで分かっているわけではない。プロテスタント、つまりユグノーで、ナントの勅令が撤回されるとオランダを経由してイギリスに逃れ、そのまま没するまでイギリスの地にあったらしいが、東方趣味あるいは歴史上の人物に対する関心に基づくと思われる散文の物語が幾つかあり、パリで出版された *Astérie ou Tamerlan* (1675) はそうした一連の作品群のひとつにあたる。<sup>4)</sup> すでに王政復古前からフランスの影響は見られ、十七世紀の半ばには同種の作品の英語訳が相当数出

版されていたことが知られているが、<sup>5)</sup> ソーンダーズはその傾向が一層顕著になった時期に、翻訳されてまだ間もない異国趣味の物語を題材にして、歴史上に名高い同じ征服者が登場するとはいえ、マーロウの時代や作品とは直接関わらない、大陸経由という新しい流行に乗って一篇の戯曲を作り上げていたのである。

# 1

さて、物語は全体で二部構成になっていて、その都度タイトルが繰り返されているが、いずれの場合でも扉のそれとは多少異なって '*Asteria, or Tamberlain. A Novel.*' とされている。この方がむしろフランス語の原題に近いことになるが、英訳者の 'E. C.' なる人物がさる貴族の女性に宛てた書簡形式の献呈の辞において、物語を要約して '*History full of various and perplexed Accidents from which your distress'd Asteria is at last happily delivered through the constancy of her Love to the as faithful and generous Adanaxus*' と紹介しているように、Tamberlain (Tamerlane) はもはや物語の中心人物ではなく、その息子 Adanaxus と、その彼が思いを寄せる女性 Asteria の運命をめぐって物語は展開する。ソーンダーズの芝居との異同に注目しながら、ここでまず人物関係を整理しておく、Tamberlain にはもう一人息子がいて、原作では Themir となっているのに対して、ソーンダーズの芝居では Mandricard の名前で登場している。ただし、その場合でも本当の名は Themyre とされており、劇中で実際二度ばかり言及されているが、さる事情から上の別名を名乗る格好になっている。同じような名前の変更は Adanaxus の方にも見られ、ソーンダーズの芝居では、この名前は追放の身にある時に用いられるもので、登場人物としての正式の名前は Arsanes という。ところが、面白いことに、どちらの名前も同じ形のまま見られはするが、原作ではそれが逆になっていたことが分かる。そして、この二人の兄弟がライバル同士として競い合う相手の女性が、タイトルにある重要人物の Asteria で、Tamberlain の宿敵 Bajazet の娘にあたる。彼女の場合にも、Adanaxus (Arsanes) と初めて出会った時点での名前に若干の違いがあり、ソーンダーズの芝居では Nerina であるのに対して、原作では Neris となっている。しかし、その二つの名前の使い分けについては、原作の場合でもソーンダーズの芝居でも違いは見られない。以上が物語の中核をなす三人の人物たちである。

物語の展開を直接担うこれらの三人を取り巻く人物の場合には、Tamberlain や Bajazet を始めとして、ほとんど変更されている所はない。Tamberlain の側近で Themir (Mandricard) の補佐役でもある Odmar や、Adanaxus (Arsanes) を常に見守る沈着冷静な Axalla は変わりなく登場してくるし、Asteria に仕えその相談相手にもなる侍女も、原作では Xaira となっていたのが Zayda と改められる程度である。また、主要人物とは言えないがヒロインの身の振り方を左右しかねないほどの重要な意味を持つ人物である、彼女自身の兄弟の Ortobulus とビザンツ皇帝の息子 Andronicus は、どちらにも共通して見られる人物である。その他、様々な局面で登

場するその場限りの人物には当然違いは出てくるが、しかしながら、重要人物の中でソーンダーズの芝居の方にしか出てこない人物が一人だけいる。それは Mandricard (Themyre) の妻の Ispatia であり、その存在によって原作にはなかった色合いが付け加わることになるのは、Asteria との関係から容易に想像がつくであろうし、また、その Ispatia が劇もかなり進んだ第二幕の終わりになって、かなり唐突な形で初めて姿を見せていたことも、ある程度これで説明できるように思われる。一方、この不協和音を持ち込むだけの人物が登場してこない原作は、ソーンダーズの芝居に比べると、より純粋な歴史ロマンスになっており、その物語展開で強調されることになるのは、以上のような敵と味方、親と子、あるいは兄弟などが複雑に絡み合った人間関係の中で翻弄される主人公やヒロインには如何ともしがたい運命の力ないしは悪戯である。実際、物語は次のように語り出されている。

With a great deal of Reason is Fortune made to stand upon a Globe, which is under an Impossibility of having any solid steadiness, being the first Principle of all Revolutions. (p.1)

このような一般論に引き続いて、運命の測り難さ、この世の有為転変を示す好例として、このような場合には珍しくないことだが、Tamberlain の前に敗れ去ったトルコのスルタンで、かつては栄華を誇っていた Bajazet が引き合いに出されてはいる。しかし、Tamberlain の場合と同じように、この物語で重要な位置を占めるのは、次の引用が示す通り、むしろその敗北の影響を蒙る人々、なかでも娘の Asteria をめぐる運命であって、もはや征服者・被征服者たち自身の話ではないのである。

The Wife and Daughter of Bajazet were partakers of his misfortune; the former of whom died a little while after, but the Daughter, being, either more couragious, or of a more robust and resolute Spirit, was better able to resist the attaques of Fortune . . . (p.3)

そして、第一部、第二部を通じて、この 'attaques of Fortune' の最たるものになるのが実は Tamberlain の長子 Themir であり、その彼が捕虜としてサマルカンドに連れて来られた Bajazet の娘 Asteria を見初める所に、この物語の事実上の発端がある。

## 2

ソーンダーズの芝居でも発端は同じ所にあり、物語もまた概ね同じ道筋を辿って行く。しかしながら、登場人物の名前のみならず、その性格づけにおいてもかなり変化している場合があり、

Asteria に拒絶されるにもかかわらず積極的に何度も繰り返して結婚を迫る Themir もその例に相当する。ソーンドーズの Mandricard の場合にはさほど表立った行動はとらず、舞台上ではむしろ不気味で陰険な人物に映るのに対して、原作の Themir という人物は、‘He was violent and furious in his Temper’(p. 5) とあるように、はっきりと直情的で行動的な人物とされている。第一部の物語は、そのように性急な所のある Themir が度々の働きかけにも応じない Asteria について業を煮やし、父親の Tamberlain まで動かして突きつける究極的な選択を焦点として展開する。その選択とは、結婚を承諾するか、それとも、同じく捕虜となっている父親の Bajazet の処刑のいずれの道を選ぶかというもので、娘の Asteria にとっては、まさしく ‘Fatal Choice’(p. 9) 以外の何物でもない。ここには根本的な敵対関係に加えて、Themir の側でも、あるいは Asteria の側でも、親子関係が介在しているが、Asteria が Themir をこれほど忌み嫌うのには、そもそももうひとつ別の理由があったのである。それが話を一層複雑なものにしているのだが、この Themirこそ、Bajazet の息子であり Asteria の兄弟にあたる Ortobulus の生命を奪った張本人であって、しかも、そのやり方には承服できないものがあったことが、後に公平な立場から詳しく明らかにされている。

*Axalla* struck him [*Adanaxus*] with a horror for the inhumane actions of *Themir*, especially for the death of young *Ortobulus*, whom with his own hand he had cruelly murdered, after a battle where that young Prince had done immortal actions, and from whence he went out so wounded, that he might have expected the succour of a generous Enemy, with a great deal of more reason than the death he had received. (p.26)

これが Asteria が頑なに Themir を拒み続ける決定的な事情と言えるが、死を宣告されたに等しい Bajazet 本人にしてみても、突きつけられた選択は簡単に答えを出せる性質のものではもちろんないであろう。しかし、二人の互いに互いを思いやるやりとり (pp. 9-14) の後、誇りを最後まで失わない Bajazet は苦渋に充ちた決断を下し最終的には自らの死を選ぶに至り、やがて処刑の時が訪れるのである。

ところが、ここに登場してくるのが Tamberlain のもう一人の息子 *Adanaxus* (*Arsanes*) であり、その出現によって間一髪で処刑が中断されることになる。Bajazet の生命を取りあえず救うこの *Adanaxus* については、その登場の仕方において、原作とソーンドーズの芝居とではかなりの違いがあるものの、<sup>6)</sup> Themir の場合のような人物像の違いは見られない。どちらの作品でも人々に親しまれている好人物とされ、突然の帰郷も大いに歓迎を受けている。特に原作の方ではそうで、‘This Prince was dearly beloved by the *Tartars*, and they with an extreme affliction resented his absence; so that they solemnized his return with shouts of joy . . .’(pp. 16f.) とあるように、まさしく手放しの歓迎ぶりである。しかし、一人快く思わない

のは兄の Themir で、もともと Adanaxus をサマルカンドの宮廷から追放させたのも彼だった、という次の記述を見ると、波乱含みの展開がすぐさま予想されてくる。

*Themir, Tamberlain's Eldest Son . . . had an absolute Empire over his Father's mind, and had abused it by his ill conduct, even to the banishing of Adanaxus from the Court, otherwise called the Prince of Tanaïs, his younger Brother. (p. 4)*

Themir が弟を遠ざけた具体的な理由までは明らかにされていないが、とにかく何らかの確執のあった兄弟が、図らずもここで再び顔を合わせることになったわけである。ただし、この新たな対立が避けられない状況において事態が本格化するの、物語の後半、第二部に入ってからのことになる。

ところで、この対照的な二人の兄弟を父親の Tamberlain はどう見ているのか。ソーンダーズの芝居でもそうだが、Tamberlain は、人格的には申し分ないがしばらく姿を見ることのなかった Adanaxus よりも、身近でオスマン・トルコ相手の戦いでの活躍ぶりを見た長子 Themir の方を、どちらかといえば高く買っている状態にある。わざわざ息子の結婚のために Asteria を訪ねることになったのも、Themir に 'the blind Friendship of his Father' (p. 6) を利用された結果に他ならない。そんな時に現われた Adanaxus は、Tamberlain にとっては、次のように、むしろ悩みの種になりかねない存在なのである。

*Notwithstanding the difference Tamberlain had put between his two Sons, the merit of Adanaxus disputed in his breast against the natural inclination he had for Themir . . . (p.17)*

しかも、再会後に Adanaxus に求められるのが、かつての宿敵 Bajazet の助命ということになると、その悩みは増すばかりである。しかし、Bajazet の傲慢に対する憤りを強調して気持ちを変えない Tamberlain と辛抱強く慈悲を訴え続ける Adanaxus との長い話し合い (pp.17-22) の中で結局 Tamberlain の心を動かすことになったのは、Adanaxus の次のような言葉だった。

*Think, Seignior, that Bajazet has not long since seen<sup>7)</sup> what you are at present, yet the fate of Arms is capricious, it may do again for him what it has done for you; and if you are out of a prospect of fearing; you have Sons, who may one day meet with Conquerours, and who may implore the same grace I now demand. . . (pp.20f.)*

要するに運命の逆転への恐れということだが、なかでも、最後に次の世代のことが持ち出されたのが効き目があったのであろう、Tamberlain は Bajazet の処刑を取り止めることに同意をする

が、ただ、一つだけ条件がつけられる。それは、Bajazet の生命を救う代わりに彼から Themir と Asteria の結婚の承諾を取りつけることで、今度はその説得役に Adanaxus が命じられるのである。後の展開からすれば実に皮肉な役回りと言わざるを得ないが、これにはある思い違いが関わっており、この時点では彼は当面の目的を達成した満足感に浸りながら Tamberlain の許を去る。

こうして Adanaxus は何も知らないまま、しかも説得は難しいと予想しながら、Bajazet が収容されている牢獄まで足を運ぶのだが、結果的にはやはり不首尾に終わる説得の件 (pp.69-77) で注目されるのは、通常のイメージとはかなり異なる Bajazet の人物像である。確かに、Themir に対する癒しがたい憤りには、次の言葉のように、激しい気性を窺わせるものがある。

You do not possibly know, that this *Themir*, which you offer to me for a Son in Law, is the Author of all my sufferings; that it was his criminal hand, that basely before mine eyes did spill the blood whom I intirely loved . . . Ah! Seignior, if you believe me to have any valour and resolution, judge by the tears that this remembrance fetches from me, unto what excess my indignation swells. 'Tis one of *Themir's* most bloody outrages, but it is not the only One, *Bursa* pillaged; *Sebastia* destroyed; my children become Fugitives; my Wife, oppressed with the rigours of her Captivity, dead; *Asteria's* imprisonment; my own, and the treatments I have met with in it, are as so many effects of his furies: and ah! would you have me, Seignior, renounce my hatred in favour of an Enemy who has so well deserved it? (pp.73f.)

しかし、同時にまた、相手の Adanaxus に劣らず節度を持った人物にも描かれていて、意外なほど共感を込められた記述が目立つように思われる。例えば、今後の身を案ずる Adanaxus に答える Bajazet には、次のように、自己の運命を甘受する落着き払った態度さえ見える。

. . . the present time is so wretched that it puts me into a capacity of dreading the future, interrupted *Bajazet*, and there is nothing that we need to fear, when we have only a life to look after, which derives all its troubles and torments from the length of it. (p.76)

これは他の箇所でも見られることで、その最も際立った例は、場面は遡るが、Adanaxus が登場する直前の処刑台での姿を描写した一節であろう。Axalla をはじめ処刑に反対する声も少なかったという前置きがあった後続くのは、事実、好意的としか言いようのない次のような調子の文章なのである。

. . . the unfortunate *Bajazet* was unworthily conducted to the Scaffold where he was condemned to lose his head. But how considerable soever the person was, yet was not this Imperial Majesty suffered to have any respect: he went to the fatal place, as if he was the meanest of all Mankind, without any thing to distinguish him, besides his resolution, and an Air of greatness which it was impossible for all his miseries to despoil him of: he was sorrowful, but withal sedate; and if his eyes had not in them all that vigour and sprightliness as before, they lost not their vivacity from any prospect of fear or weakness. (pp.15f.)

実際、第一部全体を通して見られるこのような記述あるいは *Bajazet* 自身の語る言葉を見ていると、*Tamberlain* の方がむしろ激しやすい性格として描かれているとすら思われてくる。これはマローウが描く所の *Bajazeth* とはもちろん異なっているし、また、興味深いことに、この原作に依拠しているはずのソーングーズの芝居でも必ずしも同じようにはなっていない。<sup>8)</sup> この違いには劇と散文物語という形式の違いも関わってくるであろうが、原作の根底にあるのが運命の転変という主題である点とも関わる所が大きいと思われる。*Bajazet* がその主題を作中にまず設定するべく位置づけられた人物であるとすれば、このように破格の扱いをうけたとしても決しておかしくはない。そして、この *Bajazet* を中心に、一方には *Tamberlain* と *Themir*、他方には *Asteria* と *Adanaxus* という主要人物が配置されて物語が進められていくというのが、この作品の基本的な構図なのである。*Bajazet* の側に立つ二人は、これまで見てきたように、前者の二人に絶えず脅かされながら、この後 *Bajazet* と同じく運命に翻弄されるがままになる。しかし、その運命を辿る前に、*Adanaxus* が、ある思い違いから選りによって兄の *Themir* を *Asteria* に結びつける役を進んで果たすに至った経緯を説明しておかねばならない。

### 3

物語の第一部、第二部のいずれにおいても、それぞれ ‘The History of Prince *Adanaxus*’ (pp.29–61), ‘The History of the Princess *Asteria*’ (pp.171–78) と題された語りの部分が組み込まれていて、ともに一人の人物に連続して語りかける形で詳しく物語の核心に関わる背景を明らかにしてくれている。そもそも、物語の大半が、二人の人物の間のやりとり、例えば、*Tamberlain* と *Adanaxus*、あるいは *Bajazet* と *Asteria*、といった具合に、対話の形の部分で構成されているのだが、それが一定の纏まりをもって独立した格好になっているのが上記の二つの「物語」である。なかでも、最初の *Adanaxus* が気心の知れた *Axalla* に語る話は量の上でも第一部の三分の一に達しており、大変重要な情報が盛り込まれている。かいつまんで言えば、それは、*Adanaxus* がサマルカンドに突然帰郷するまでの、追放の身にあった時期の波乱万丈の物語ということになるが、久方ぶりに故郷に帰り *Axalla* と旧交を温めながら、しかし一刻も早く

また元の場所に戻ることを望む事情が切々と語られる告白の物語でもある。<sup>9)</sup>

Adanaxus の語る所によれば、サマルカンドを離れた彼は素性を隠したままアジアやヨーロッパの各地を転々とし、その後、その接点にあたるコンスタンティノープルのビザンツの宮廷に身を寄せたという。ビザンツを脅かすオスマン・トルコとの戦いでは功績を挙げ、そのおかげで皇帝 Paleologus をはじめ宮廷の人々から厚遇され、しばらく滞在を続けていたのだったが、やがてそこにトルコの捕虜の一行が到着する。その中に Neris という名前の一人の女性がいた。宮廷全体が忽ち虜になるほど魅力的な女性で、Arsanes (Adanaxus) も一際強い関心を抱くが、しかし、そこに強力なライヴァルとして現われたのが皇帝の息子の一人で、Arsanes とは対照的な性格の持ち主の Andronicus だった。<sup>10)</sup> Themir を思わせるその強引さには父親の Paleologus も手を焼くほどで、執拗に積極的な働きかけを求められていたが、それでも、ふとしたことから、控え目であくまで慎重にしていた Arsanes にも、次のように、Neris と言葉を交わす機会が訪れる。

... since my fate gives me this opportunity to speak to you without any witnesses, suffer me to explain, Madam, and to tell you, though I appear here unknown yet your condition might be as happy with *Arsanes* as with the Son of the Emperour of *Greece*. (p.42)

しかし、この段階で相手の Neris から聞き出せたことといえば、彼女が Andronicus を嫌っていること、そして、次のように、本当の素性を隠した Arsanes と変わらないぐらいに漠然としていて謎めいたその生い立ちにとどまった。

But all I could learn from her was that she was born in the heart of *Africa*, of a quality sufficiently illustrious, and that she had been taken by the Pyrates, and afterwards sold to those whom *Andronicus* had taken prisoners. (pp.44f.)

事態が大きく動き出したのは、トルコの脅威に晒された国情を慮って、皇帝の Paleologus が Andronicus の目から密かに Neris を遠ざけようとしたのがきっかけである。本人にも知らされないまま Neris を国外に連れ去る手筈が整えられ実行に移されるのだが、しかし、同じく何も知らずにその現場をたまたま通りかかった Arsanes に阻止されて企ては失敗に終わる。この時 Neris を救い出そうとして手傷を負った Arsanes と彼女との間はかなり近づくことになったが、その一方では Andronicus の動きに拍車をかけることにもなった。事の真相をうすうす感じ取った Andronicus は一層強く迫るようになり、やがて、その脅しに恐れをなす Neris を見て放置できなくなった Arsanes は、二人して国外に逃れることをもちかけるに至る。そして、ついに Arsanes が素性を明かしたのはその時のことだった。ところが、Neris からは予想だにしない反



応が返ってきたのである。その時の模様を Arsanes は次のように語っている。

She looked upon me a good while, as if she had not known me, blushed, sighed, was speechless, and indeed all her Actions showed me the condition so great a surprise put her into. (p.55)

こうして Arsanes が Neris を説得できないでいるうちに、Andronicus の方は徒党を組んで、一度ならず二度までも父親である皇帝に叛旗を翻し、ビザンツの宮廷は内紛状態に陥ってしまう。Arsanes にとって不幸なことには、その大混乱のさなかに Neris は姿を消し行方知れずになってしまったのである。ここからまた、Arsanes の放浪の旅が始まる。Neris の話にあったアフリカを手始めに、彼は数えきれないほどの土地を尋ね歩くが、彼女の消息はつかめないまま四年の歳月が流れようとしていた。ちょうどその頃のことである、彼はオスマン・トルコが敗れスルタンの Bajazet が Tamberlain の捕虜となったという噂を耳にしたのだった。

以上が Adanaxus (Arsanes) が Axalla に語って聞かせた話の要点である。これによって、ソーンダーズが劇化するにあたって直接にはほとんどふれていない、物語の前史ともいうべき背景の事情が明らかになるが、原作の枠内で考えてみても、Adanaxus はもちろんのこととして、Tamberlain と Paleologus, Themir と Andronicus, といった人物間の照応関係が明らかに意識されていることが分かってくる。そして、問題になるのが Asteria と Neris の「関係」である。Adanaxus は気づいていないのだが、Asteriaこそが実は彼が捜し求めてきた Neris なのである。<sup>10)</sup> それに対して、Asteria には Adanaxus が Arsanes であることが分かっており、相手もてっきり同じように自分のことが見抜けていると思ひ込んでいる（‘She did imagine he knew her for Neris’, p. 63）。そこから二人の間にまた行き違いが生じてしまうのは避けられない。しかも、他ならぬ Adanaxus が、すでに前節で見たように、Themir との結婚を説得しにやって来たという話を Bajazet から聞かされるのである。Asteria が驚いてしまうのは無理もないことで、彼女は、同性である侍女の Xaira に向かって、次のようにめずらしく激しい調子で、その忿懣をぶちまけることになる。

He is unfaithful, this *Arsanes*, said she to her, who seemed so little capable of infidelity; he betraies both his oaths, and my hopes, and not only forgets the Love he promised *Neris*, but he would with his own hands deliver her into those of an unworthy Rival. Ah! *Xaira*, how treacherous is the Sex of Men, how fatal is that of ours, and how wretched and little experienced do we discover our selves, when we believe any thing that Mankind tells us? (p.83)

一方、Adanaxus の方は何も知らぬまま、次の引用が示す通り、早く Bajazet の一件を片づけて

搜索を再開したいと思っているぐらいであって、二人が再び別れ別れになってしまう恐れが十二分にある状況が出来上がってしまっているのである。

. . . the young Prince [Adanaxus] . . . blindly carried away with the desire of finding out his *Neris*, was preparing for a second Voyage all the Earth over, and found a great deal of difficulty to give his generosity a few dayes rest at *Samar-canda*. (p.67)

こうして、二人の運命の行く手に不安と緊張を孕みながら物語は進んでいこうとするのだが、しかし、Bajazet の一件は思ってもみない形で決着がつき、やがて、Adanaxus が Neris をついに「発見」する瞬間が訪れる。

#### 4

第一部の物語の大詰めは、Bajazet の死をきっかけにして事態に劇的な変化が見られる箇所だが、ここですで注目しておくべきものは、その死の様子が語られる件であろう。一般に流布している描き方とは全く異なっているからである。通常では、Bajazet は Tamerlane から手酷い虐待を受けた挙句、憤激の余り檻の鉄格子に自ら頭を打ちつけて生命を断つことになっている。マローウのものが最もよく知られた例ということになるであろうが、ソーンドーグズの場合でも、侍女の Zayda (Xaira) が Asteria に次のような報告をしている。

Impatient of his wrongs, the Royal Captive,  
As he through *Samarcanda's* Streets was led  
A publick Trophy in his moving Prison,  
Against the massy Bars with rage he dashed  
His Royal Head . . .

(Act III, p. 34)

このような文字通りの憤死が通例であるのに対して、この原作では、そもそも虐待と呼べるものは特に記されておらず、むしろ、といってもあくまで比較の上でのことだが、丁重な扱いを受けているとさえ言えるぐらいである。しかし、それでもやはり囚われの身からくる心労はあり、それが原因で Bajazet は病に倒れてしまう。問題はその記述である。

If he was affected with it [his mortal sickness], it was only with joy; and the violence of his distemper did not in the least deprive him of his reason, for he

perceived with pleasure by the diminution of his health, that his sufferings were now ready to take their leave of him, and to end with his life. (p.84)

この作品で Bajazet が作中人物としても異例の丁重な扱いを受けていることは、すでに見た通りだが、この最期の場面においてもそれは変わっていないことが分かる。ここには、Bajazet がその人物像にふさわしく、憤死には程遠い、安らかな死を迎えようとしていることがはっきりと読み取れるであろう。その死の原因については歴史書において異説がなかったわけではない。<sup>12)</sup> しかし、少なくともこの記述が例外的なものに属することは明らかで、それが証拠にソーンドーズは原作のこの記述を捨てて、上のようなより一般的な形のもので置き換えてしまっているのである。しかも、マーロウの場合のように舞台上に実際に再現してみせるわけでもなく、報告という形で、ごく簡単な型通りの扱いしかなされていないという事実は、より一層その辺の事情を物語ってくれているであろう。

いずれにせよ、死に臨んで Bajazet は、信頼を置く Adanaxus を枕元に呼び寄せ、残る唯一の気掛かりである娘の Asteria のことを託す。ちょうどそこへやって来るのが、悲しみに泣き腫らした目をした Asteria 本人であり、ここで二人はとうとう面と向かい合う。必然性はないかも知れないが、死の床にある Bajazet が主人公とヒロインを引き合わせることになったのである。そうして、目を真っ赤にし顔も青ざめてはいたけれども、Adanaxus にも判別できないわけではなかった、という前置きの後に記されるのは、次のような二人の「再会」の瞬間である。

... he came up three or four steps to her, and his surprise not permitting him to come any farther, he stop'd and became immoveable: and found himself at that juncture of time capable of doing nothing but giving her his most languishing regards. He at last pronounced the Name of *Neris* many times over, with such remarkable demonstrations of Love, that *Asteria* was almost certain of her errour ... (p.88)

最後の部分にあるように、これでようやく Asteria の側の誤解も解ける条件が整った訳だが、読者にとっても期待されたこの出会いの場面は、しかしながら長続きはしない。ほどなくして、例の Themir までもが姿を見せるからである。それがために Bajazet もついに息絶えることになった、という具合にどこまでも悪玉扱いされる Themir だが、こうして Adanaxus と Asteria の出会いが成就すると同時に、二人の兄弟 Adanaxus と Themir の全面对決もいよいよ避けられない状況が出来上がる。さらに加えて、第一部も大詰めになって俄にその存在がクローズ・アップされる人物がいる。その人物とは、'*Themir's only confident*' (p. 93) と説明があるように、Tamberlain の側近の中で Themir がただ一人頼みとする Odmar である。ソーンドーズの芝居とも共通する重要人物で、ただ最初の場面から結末に至るまで終始登場している点が原作と違って

る。<sup>13)</sup> しかし、原作においてもその重要性は変わらず、この後、物語の第二部において決定的な役割を果たすことになるが、その意味では、Nerisの謎が解けて主人公とヒロインの関係に明るい光が射しかけた矢先に、二人の行く手に不吉な影を落とす存在として、第一部を締め括るのに最もふさわしい人物であると言ってよい。このように何とも慌ただしい動きの見られる第一部の大詰めではあるが、第二部の物語を担う主要人物がBajazetの死の場面を背景に一気に出揃い、今後の新たな展開に不安と期待を抱かせる結末でもあることは確かである。

## 5

AdanaxusとAsteriaの二人がようやく再会するまでが第一部の物語とすれば、第二部は、さまざまな難局を乗り切って二人が真の意味での和解に到達するまでの物語とすることができる。そして、その焦点が、第一部も終わり近くになって登場し、二人の間を阻むべく背後でいろいろと奸計をめぐらすことになる黒幕的人物Odmarの動向にあるのは、すでに触れた通りである。Themirとその後ろ盾としてのOdmarの切っても切れない関係は、最初の登場の際にすでに次のような文章でもって強調されていたのだが、第二部に入ると冒頭から、その記述を裏切ることなく、Odmarは不気味な力を遺憾なく発揮し始める。

This person had been Governour of the Prince of *Tartary*, of a wicked and pernicious spirit, and a barbarous humour, and who had inspired into him by a dangerous education, those violences and furious resolutions, which made him capable of so many cruelties, and he would lay his contrivances with so much artifice and security, that though he had been of his blood, they could not have more resembled those of *Odmar*. (pp.92f.)

その人物像はソーンダーズの作品中のOdmarにもそっくり引き継がれているが、まず手掛けることが、血気にはやり今にもAdanaxusに手を出しかねない状態にあるThemirの気持ちを沈めさせ表立った行動を取らないように厳重に言い聞かせた上で、AdanaxusとAsteriaの二人の関係に探りをいれて正確に事態を把握することであるのを見れば、Odmarという人物をほぼ間違いなく思い描けたことになるであろう。

そうしたOdmarの策動に知らず知らずのうちにめられていくAdanaxusとAsteriaの側に立って見ると、第二部の物語は大きく前半と後半の二つの部分に分けられる。Asteriaの監視の強化に始まりAdanaxusが塔の中に幽閉されてしまうまでがその前半(pp.95-143)、巻き返しの動きが起こり秩序が回復されるに至るのが、残る部分の後半(pp.143-190)である。こうした大きな流れに沿って、前半から主だった事態の推移を辿っておくと、そもそもAdanaxusは第一部の終わりでAsteriaとの再会は果たしたとはいえ、彼女の心を完全に取り戻せているわけ

ではないという所が出発点となる。そんな状態であるにもかかわらず、Themir に妨害され会うことも思うにまかせないということになると、一切の前進を望めなくなってしまうであろう。そこで彼は Asteria の自由を求めて Tamberlain に思い切って直訴するのである。ところが、何よりも Themir のことを優先する Tamberlain のことである。やはり 'I do not mean Asteria shall play the Tyrant here'(p.106) といった冷やかな反応しか返ってこない。こうして途方に暮れるまま二ヶ月が経過するが、しかしながら、ふとした偶然から千載一遇の好機が訪れる。とある夜、せめてもの思いから人目を忍んで Asteria の居室近くの場所で Adanaxus が一人過ごしていると、次の引用に見られるように、思いがけず人の気配がしたのである。

The Moon shone very bright, and the Prince of *Tanaïs* had no sooner leaned himself against one of the Ballisters that encompassed the Terrace, but turning his head at the noise of some sighs he heard emitted near him, he perceived a Lady whom he immediately knew to be the Princess . . . (p.109)

物語の重要な要素として名前がそもそも問題になっている点も含めて、まるで『ロミオとジュリエット』であるかのような甘い雰囲気漂う場面と言ってよいが、<sup>10)</sup> しかし、この待ち焦がれた出会いも Adanaxus にとって決して生易しいものとはなりえない。Asteria にいろいろ手厳しく問い詰められてしまうからである。特に問題にされたのは、コンスタンティノープルで Neris の素性をつかめていなかった点('... there is not one that dwells at *Constantinople*, who has not heard that *Neris* was *Bajazet's* daughter', pp. 111f.)で、それに対しては、Adanaxus は第一部で Axalla に話した通りの説明を一段と熱を入れて行ない ('... could I inform myself of *Bajazet's* daughter, when I was running after an *African Lady?*', p. 114), ようやくのことで行き違いの事情に対する理解を得る。そうして、現在二人を最も悩ませている Themir からの圧力に関しても、Adanaxus が Asteria を生命を懸けて護ることを力強く宣言する ('I am no longer that weak and diffident *Adanaxus*, whom the domineering carriage of an elder Brother did formerly send away from *Samarcanda*, I am now a passionate Lover . . . ', p. 119) ことで、二人は真の意味での和解に達し、やがて幸福の時が訪れる、あるいは、訪れたかに見えた。

ところが、この密会は実は Odmar が密かに張りめぐらした見張りに目撃されていたのである。ここから二人にとって事態は急激に悪化し、またまた受難の時が始まる。前のやりとりの中でも Asteria は、'he [Themir] knows that we have formerly been acquainted, though by what means, it has yet been impossible for me to learn'(p. 119)と不安を洩らしていたように、二人の様子は Themir の所にまで逐一伝わっていた。その報告に当然のごとく憤慨した彼は、Odmar の注意をつい忘れて性急な行動に走ってしまいそうになり、現実には刀に手をかけるということも起こった。これにはさすがの Tamberlain も慌てて Themir をたしなめたのだった

が、それで収まるはずのない Themir から相談をうけた Odmar がその対抗手段として考えつくことは、Themir をさえ一瞬怯ませるほどの内容だった。その要点は Adanaxus が Tamberlain の王位と生命を狙っているというデマを流すことにあるが、次に示す通り、問題はその先にある。

*Adanaxus shall dye hated by his father, his Ruine shall appear legitimate, you shall enjoy the tranquillity that that can procure you, and if the Emperour by an unheard of inconstancy, protects him and abandons you, you shall then break out, the revolt will be permitted you and it may be something more. (p.133)*

もちろん Themir をたじろがせたのは後半の件だが、Odmar に ‘But Prince . . . does nature still seem to work in you?’ (p.133) という挑発的な言葉でけしかけられては堪らない。<sup>15)</sup> こうして、計画がいよいよ実行に移されることになるが、Odmar は、さまざまな偽の情報を別々の人物から流させるなど、慎重かつ入念に、事を進めて行く。とりわけ Tamberlain の心を揺さぶったのは、Adanaxus がオスマン・トルコ側と密かに結託しているという噂で、彼が Bajazet の助命をかつてあれほど熱心に説いたことが、ここではその有力な証拠として持ち出されることになったのである。Odmar の目論見はまんまと成功し、Tamberlain は、とうとう Adanaxus の身柄を拘束、そして、ロンドン塔ならぬ ‘the Tower of Samarcanda’ (p.139) 送りをする事を決定してしまう。ちょうど Adanaxus が連行されて行こうというその日、事態の変化を全く知る由もなく、たまたま侍女とともに窓辺に立った Asteria が目にしたのは、以下に描かれるような、彼女を侍女の腕の中に思わずくずおれさせるに足る光景だった。

*Asteria was leaning at her Chamber-Window, and thinking on the Prince of Tanaïs, just as he saw him in the midst of Tamberlain’s Guards without his Sword, though she had been fancying him a thousand times in that posture before then, yet was not her surprise less great; she gave a horrible shriek, which obliged the Prince to cast his eyes that way, and he had no sooner done so, but he perceived her sinking into the arms of Xaira. (p.142)*

## 6

Adanaxus が幽閉されたという知らせは、サマルカンドの宮廷内に大きな波紋を呼び起こす。彼は人々の信頼も篤く、好意を寄せる人も決して少なくなかったがゆえに、たちまちのうちに不満の声が聞かれるようになったのである。その先頭に立ったのは、Adanaxus にとっては Themir に対する Odmar のごとき存在である Axalla だった。Axalla は、何度かにわたって辛抱強く Tamberlain に訴え続けなければならなかったが、その結果、はじめのうちは、その理を尽くし

た訴えを十分に顧みることのなかった Tamberlain も、やがて耳を傾けるようになってきたのである。そうした変化をもたらす上で決定的だったのは、Odmar が人を使って流布させた噂の中で Tamberlain を最も憤慨させた点に関して、次のように、Axalla に指摘されたことである。

... in the extremity to which *Bajazet* was reduced when *Adanaxus* arrived at *Samarcanda*, can you find any probability that his return was design'd by the *Ottoman* Prince, or by his daughter? (p.151)

同じ急所をつかれる格好になった Tamberlain だが、Axalla の熱心さに負けて事実を把握するために Adanaxus と Asteria のそれぞれから話を聞くことにするなど、冷静さを取り戻しつつあることは明らかだった。特に後者の場合には、自ら積極的に向かい直接本人から確かめることにするほどであり、事態は好転する兆しをはっきりと見せ始めたと言えるぐらいに回復してきていた。そればかりか、二人の話が細部まで一致し、その間柄も薄々分かってくると、Asteria が Adanaxus の許を訪ねることが許されるまでになったのである。一方、Axalla による巻き返しがこのように着々と進んでいる間に、Odmar が黙って見ていたわけではもちろんない。情勢が不利な方向に動き出したのを察知すると、真相の発覚を恐れて、偽の情報を流させた者たちをあらかじめ秘密裡に脱出させておくなど、相変わらずその策士ぶりを発揮してはいたが、しかし、明らかに防戦に終始することが避けられない状態にまで追い込まれており、力関係が逆転するのものはや時間の問題となっていた。

そして、こうして身の潔白を証明された Adanaxus が、やがて Axalla のさらなる懇願によって幽閉状態から釈放され、晴れて自由の身となって Asteria と出会うことを許される時がやってくる。<sup>16)</sup> この二度目の再会において二人は改めて互いの気持ちを確かめ合うことになるが、この場面には、その一部として、ちょうど第一部に Adanaxus の語る物語が組み込まれていたのと同じように、今度は Asteria が語る物語が含まれている。長さの上では Adanaxus のものに比べてかなり短いものではあるが、コンスタンティノープルで行き違いになった経緯が Asteria の側から明らかにされ、Adanaxus のそれと補い合う形になっているなど、いくつか注目すべき記述を見ることができる。まず、問題の別れ別れになった事情だが、ビザンツ宮廷の混乱のさなかに Neris (Asteria) を連れ去ったのは、そもそも彼女のことがもとで混乱を引き起こした張本人の Andronicus その人であったことが判明する。さらに Asteria が語る所によると、それまでは身に危険が及ぶのを恐れて素性を隠していたのが、この時は逆に Bajazet の娘であることを明らかにすることで危害から身を護ろうとしたことが、その後の Andronicus の行動のきっかけとなってしまったのだった。彼は早速 Bajazet との交渉に出かけて行くが、きっぱりと断られてしまう。すると今度はそのトルコ軍に対して戦いを挑むこととなるが、しかし、Asteria の兄弟の Orto-bulus が率いる軍勢にあっさり敗れ和平を余儀なくされる。そして、ここに登場してきたのが Tamberlain だった。以上のような背景を持つ Andronicus に促されたということもあって、

Tamberlain は Bajazet の軍勢と戦いを交え、結果はすでに明らかな通り、Themir のために Ortobulus を喪い、Bajazet さえ捕虜となってしまったのである。Andronicus がしたこと Asteria のためになったことと言えば、離れ離れになっていた父 Bajazet と再会できたことぐらいだったが、失ったものの方がはるかに大きいものがあった。その悲哀を伝えるべく、Asteria が涙ながらに語る物語は、敗色が濃厚になった頃の Bajazet のとあるエピソードで印象深く締め括られている。それは Bajazet があてもなく馬をすすめていた時のことだった。彼は川辺で羊飼いが一人、笛を吹いている姿をふと見かける。そして、その羊飼いに彼はこう語りかけたのだという。

Oh! Too happy Shepherd, said he to him, how worthy is thy state of envy, to have nothing to spend but thy dayes, which bloody ambition never crosses; *Bajazet's* calamities will furnish you with matter for your Songs, and you may hereafter in your pitiful Numbers say, unfortunate Prince thou shalt never more see thy delightful *Sebastia*, nor thy dear *Ortobulus*. (p.178)

これは、シェイクスピアの『ヘンリー六世・第三部』の一場面を想起させる件であるとともに、トルコ史の書物においても実際言及の見られる話であるが、<sup>17)</sup> この作品における Bajazet の人物像、あるいは作品の根底にある考え方を物語の一節としても記憶に値するものであることは確かであり、物語も終わりが近づいて、Bajazet が、このような形で再登場してきているのには、やはりそれなりの意味があると考えておいてよい。

話を本筋に戻せば、Odmарによる策謀のために Adanaxus にも今の物語の中の Andronicus のような立場に危うく追い込まれる危険性があったことになるわけだが、サマルカンドにおける真の Andronicus というべき人間は別人の姿をとって現われる。しかも、意外な事実が、それに劣らぬほど意表をつく形で明らかになり、物語はいよいよ結末を迎えることになる。それは、ようやく完全な和解にまでこぎつけた Adanaxus が、Asteria と ‘...one obliging word from the Princess did move him more then the possession of an Empire could have done’(p. 181) と言うにふさわしい気分でひとときを過ごし、帰って行ってまだ間もない時のことだった。突然、Adanaxus が死んだという声が宮廷中に響き渡ったのである。これには人々は当然驚き駆けつけて来るのだが、しかし、確認をしてみると、殺されたのは Adanaxus ではなくて Themir の方だったことが分かる。そして、下手人も自ら名乗り出てあっさりと判明してしまう。その下手人こそ、他ならぬ Odmар だったのである。窮地に追い詰められていた彼は、Adanaxus 殺害を謀り、機会を前々から窺っていたのだったが、その皮肉な結果がこれだった。こうして、すべてが明るみに出される瞬間が近づいて来る。思いもよらぬ事態にすっかり平静を失ってしまっている Tamberlain に対して、Odmар自身の口から明かされるのは、次のような、驚くべき事実だったからである。



He was absolutely mine and I was ambitious to see him have the Empire, *Tamberlain*, be not surprised with so blind a passion, but render justice to nature; for *Themir* was my Son . . . (pp.184f.)

Tamberlain の生命を奪うことも辞さないという含みで Odmar が Themir に向かって言っていた言葉が、ここで何重もの皮肉な意味合いを伴って思い返されてくるであろうが、Tamberlain がなぜ Themir のことを自分の息子と勘違いすることになったのかという疑問についても、その経緯が続く Odmar 自身の説明によって明らかにされる。それによると、Tamberlain の中国遠征中に預かっていた幼な子が病死してしまったのを機に、彼はこっそり自分の息子と取り替え、そのまま Tamberlain の子供として育ててきていたのだった。これで Odmar の Themir に対するこれまでの執着ぶりも十分納得できるものになり、また、具体的には触れられていないが、Themir にも別の名前があったことになれば、Adanaxus, Asteria に加えて、主要人物の三人がすべて二つの名前を持つというのが、この物語の重要なポイントのひとつであり、その展開を面白くもややこしくもしている要素だということが、より明確になってくるであろう。<sup>18)</sup>

さて、もうここまで白状してしまえば、Odmar に残された道はひとつしかない。彼はその場で潔く自ら生命を断ち、サマルカンドの宮廷を震撼させた事件もこれで終結する。Asteria にとっては、Themir の死は、Adanaxus が彼女の兄弟の生命を無残にも奪った者と同じ血を引いていなかったこと（‘. . . the murder of *Ortobulus* was not her Lover’s Brother’, p. 188）が最終的に判明し、二人の間にあった最後の障害が取り除かれたという点でも大きな意味を持っており、こうして主人公とヒロインはめでたく結ばれる運びとなる。<sup>19)</sup> それでは、作品のタイトルに掲げられたもう一人の人物についてはどうだろうか。この作品では、マローウやソーナーズの場合とは違って、Tamberlain は Bajazet に比べるとどうも影の薄い存在であると言わざるを得ない。Bajazet は、これまで見てきた通り、物語の要所所で確固とした存在感を示している。それに対して、Tamberlain の方は稀代の征服者としてのイメージからは程遠く、Themir に振り回される所ばかりが目立つように思われる。振り返って見れば、Tamberlain が Odmar の言葉を鵜呑みにしたのがそもそもの事の始まりであるし、実際、信じやすい人物である点が強調されることさえあったぐらいである（‘He was . . . subject to a credulity which made him often take Chimera’s for truths, and the wicked and poisonous counsels of flatterers for a sincere zeal’, p.150）。<sup>20)</sup> そうして、この大詰めの部分で、事件後の Tamberlain の様子が次のように記されるということになれば、その人物像なり物語中での位置づけを最終的に見極めることが許されるであろう。

This accident divested *Tamberlain* of that cruel Meen he had before, and which made him be looked upon with so much fear; now all his severity with *Themir* had its sepulture; his eyes lost their fury; and put a very pleasing sweetness on his

face . . . (p.188)

マーロウの作品ではむしろ高く評価されていた点が、ここでは逆に否定的に受けとめられてしまっているのは興味深い所だが、その違いには、すでに時代の大きな変化があったことをはっきりと窺わせるものがあるだろう。それはまた、征服の物語から愛の物語へと重点が移行していることにも表れており、ここでは前者はもはや後者の背景でしかありえないのである。したがって、Tamberlain が中心人物でないのは、その意味では当然のことと言ってよい。*Tamerlane the Great* というマーロウと同じタイトルを持ちながら、内容の上では概ねこの原作に基づいているソーンダーズの芝居（1681）では、その点はさらに問題になるであろうが、そのちょうど二十年後にあたるニコラス・ロウの作品 *Tamerlane*（1701）でも事情はさほど変わらない。<sup>21)</sup> こうして、王政復古期のフランス指向と密接に結びついたこの英訳本に見られる特色が、多少の違いはあるとはいえ基本的には同じ傾向を示すソーンダーズの芝居を経て、後々の作品にまで踏襲されタマレイン劇の主流となっていったのだとすれば、Tamberlain を実質的な主役の座から引きずり降ろす上で一役買っているこの原作の意義は意外に大きいものがあるかも知れない。

\* 本稿は平成10年度に京都府及び文部省公立大学在外研究員補助金の助成を受けて行なった調査に基づく報告の一部である。

#### 注

- 1) 拙稿「十七世紀のタマレイン劇 — Charles Saunders の場合 — (1)」(『コルスコピア』(京都府立大学英語英米文学研究室) 第 6・7 合併号 (1997年3月), pp. 1-21) 及び「同(2)」(同誌第 8 号 (1998年3月), pp. 1-21) を参照。
- 2) ソーンダーズの作品については、大英図書館所蔵本 (Shelfmark 644. f. 46) 及び明星大学図書館所蔵本 (Shelfmark 932. D812. 699) を参照した。なお、引用にあたっては、いわゆる長い 's' を通常の形に改めてある。
- 3) ロンドンで1677年に出版されたこの英訳本 (Wing L447) を大英図書館は所蔵していない。参照したのはオックスフォード大学ボドリアン・ライブラリー所蔵本 (Shelfmark V. 82 Art 2) であり、同じく長い 's' を改めて以下引用する。なお、Arundel Esdaile, *A List of English Tales and Prose Romances Printed before 1740* (The Bibliographical Society, 1912) 及び Charles C. Mish, *English Prose Fiction, 1600-1700: A Chronological Checklist* (Bibliographical Society of the University of Virginia, 1967) を参照。
- 4) Ralph C. Williams, *Bibliography of the Seventeenth Century Novel in France* (Holland Press, 1964), pp. 62f. 及び Joan DeJean, *Tender Geographies: Women and the Origins of the Novel in France* (Columbia University Press, 1991), pp. 211 & 251f. を参照。なお、Charles C. Mish (ed.), *Restoration Prose Fiction 1660-1700* (University of Nebraska Press, 1970) には、La Roche Guilhem の別の作品が一篇、当時の英語訳の形で収められている。
- 5) William S. Clark, 'The Sources of the Restoration Heroic Play', *Review of English Studies*, vol. 4 (1928), 55.

- 6) ソーンダーズの *Arsanes* の場合には、まず黒装束に身を包んだ謎の勇士として人々の前に現われ、しばらく経った後の場面でその素性が明かされる。それとは対照的に、原作の *Adanaxus* は次のように自ら名乗りをあげて駆けつけ、*Bajazet* の処刑にストップをかける。

His cryes and name suspended that fatal blow: Hold, cryed he out, it is *Adanaxus*,  
it is the son of *Tamberlain*, who commands it of you. (p.16)

ソーンダーズが特に舞台上での劇的効果を狙っていることは明らかだが、この原作においても意外な展開という点では変わらない効果が見られるであろう。

- 7) ことによると 'seen' は直前の語の長い 's' につられた誤植かも知れない。  
8) ソーンダーズの芝居から、同じ場面に相当する部分の台詞を一例として挙げておく。*Arsanes* (*Adanaxus*) の出現で取りあえず処刑が中止になった直後の言葉であるが、ただし、原作には命拾いをした時点の記述は見られない。

Strike Villain, or I'll spurn thee into Ashes,  
Ha, ha, ha, ha, O I could burst with laughter,  
To see these Apes, these mistaken Fools,  
Who think they have been generous and kind,  
While they are dully cruel; Tyrant, blush,  
And know, wer't thou my Slave, thus would I glut  
My self with vengeance on thee, so farewell,  
And some Plague seize thee e're we meet again.

(Act II, p.14)

- 9) *Adanaxus* と *Axalla* の間柄及び後者の人となりは、例えば、次のように紹介されている。

There had continually been between them a very strict bond of friendship, and though *Axalla's* age was already advanced, he was of such a sweet and obliging temper, that persons of all Ages were infinitely taken with his company (pp.25f.).

なお、ソーンダーズの芝居では、追放中でも二人は常に行動をともにしたことになる。したがって、二人が事態について相談をする場面はあっても、*Axalla* が知らなかったことを聞かされるという状況はありえない。

- 10) ソーンダーズの芝居では、*Andronicus* はわずかに二、三度短く言及されるだけであるが、その性格づけは、'the Fury of *Andronicus*' (Act II, p.19), 'the violence/Of rash *Andronicus*' (Act III, p.33) という具合に、原作と共通している。ただ、具体的な記述が欠けていて、劇中で十分に思い描ける人物にはなっていない。  
11) この点については、ソーンダーズの芝居では、実際に顔を合わせているのに気がつかないのが不自然と感じられたのか、*Nerina* (*Neris*) が *Bajazet* の娘であることを初めて知らされる形に変更されている。二人の間の緊張は、敵同士という点に移されている訳である。逆に *Arsanes* (*Adanaxus*) が *Tamerlane* の前で名乗りをあげて、ようやく素性が確認される場面には、同種の不自然さが見られるかもしれない(注6を参照)。  
12) 十七世紀の初頭に出版された大部のトルコ通史 *Richard Knolles, The General Historie of the Turkes* (1603; 3rd ed., 1621) は、さまざまな史書を英語訳で集大成したものであるが、次のように、*Bajazet* の死に関しても異説があったことを紹介している。

Yet of his death are diuers other reports: some saying, That hee died of an ague, proceeding of sorrow and greefe: others, that hee poysoned himselfe . . . (p.227)

- 13) 興味深いことに、ソーンドーズの芝居でも、重要人物でありながら前半の終わりになって初めて登場してくる人物がいる。それは Mandricard (Themir) の妻 Ispatia で、Odmarの場合とは違って、彼女は原作には全く見られなかった人物である。
- 14) すでに触れた劇的な再会の場面には 'He [Adanaxus] at last pronounced the Name of *Neris* many times over' (p. 88) という一文が含まれていた。なお、ソーンドーズの芝居でも、状況は多少異なるが質の上ではこれに該当する箇所、次のように、名前が殊更に繰り返して使われる台詞がある。

*Nerina* always was, is present here,  
My Mind, my Soul is nothing but *Nerina*.  
This very impious Act was for *Nerina* . . .  
(Act II, p.19)

- 15) ただ、この少し前、Themir が Tamberlain にたしなめられた直後の件に、' . . . in the fury he was then in, not *Tamberlain* himself was secure from the horror of his designs' (p.131) という一文がある。
- 16) この間 Asteria の方が Adanaxus を訪ねたという記述は見られない。しかし、二人の出会いは、このようにして、より望ましい条件で実現することになったわけである。
- 17) Richard Knolles の前掲書（注12を参照）には、次のような一節がある。

As also that *Baiazet* there lost his eldest sonne *Erthogrul* (of some called *Orthobulus*) whose death with the loss of the citie [*Sebastia*], so much greeued him (as is reported) that marching with his great armie against *Tamerlane*, and by the way hearing a countrey shepheard merily reposing himselfe with his homely pipe, as he sate vpon the side of a mountaine feeding his poore flocke; standing still a great while listening vnto him, to the great admiration of many, at last fetching a deepe sigh, brake foorth into these words: O happie sheepeheard, which haddest neither *Orthobulus* nor *SEBASTIA* to loose . . . (p.216)

なお、ソーンドーズの芝居には、Arsanes (Adanaxus) が森の中で悲しげな歌に聞き入るという場面 (Act IV, p.47) があるが、それはあくまでも恋を主題とする歌である。

- 18) ソーンドーズは劇化するにあたって、Themyre という本来の名前に加えて Mandricard という新しい名前をどこからか補充し、そちらの方を専ら使っている。
- 19) ソーンドーズの芝居でも、この点は問題にはなっているが、具体性に乏しく、必ずしも分かりやすいものとはなっていない憾みがある。
- 20) 刊本のこのページの柱は誤って [123] となってしまう。
- 21) 拙稿「ニコラス・ロウのマーロウ改作」『コルヌコピア』第2号 (1991年11月), pp. 19-36参照。

(1999年9月10日受理)

(ささき しょうじ 文学部助教授)